第1部　エッセイ

テーマ「思い出のお弁当」

小中学生の部

タツノコ賞

思い出のお弁当

大野　七海

お弁当と聞くと自然に、中学一年生の時の体育祭が思い出される。

私がその年に出た競技は体育祭の定番「玉入れ」と、バランスボールを挟んだ二つのカラーコーンを両脇から二人で押さえながら走る「アイスクリームリレー」だった。

私は体育祭に期待半分不安半分というところだったと思う。もちろん一大イベントだから楽しみであった。しかし運動音痴の私はあまり気が進まなかったのも事実である。

果たして、当日は案の定うまくいかなかった。確かに楽しかったが、玉入れではほとんど玉を入れられなかったし、アイスクリームリレーではボールを何度も落とすという始末。午前中で私が出る予定の競技は全て終わったので、もう投げやりになって、家に帰ってしまいたいくらいだった。

もちろんそんな訳にもいかなかったので、仕方なくお弁当を食べるため、教室まで落ち込みながら帰ったのを覚えている。

だからこそ、蓋を開けた瞬間目に飛び込んできた真っ白なご飯や色とりどりのおかずが眩しかった。お弁当の中身はいつも母が入れてくれるものと何ら変わりはない。けれど、その飾らない中身を見た時に「頑張ってね。楽しんで」と送り出してくれた母の姿が目に浮かんだ。きらきら光るおかずの一つ一つやお米の一粒一粒が私を「頑張ったね」と労ってくれている気がしたのだ。

誰かが教室の外を見て「あっ」と叫んだ。みんなに続いて私も窓の外を見ると、校庭に置いてきた日傘やビニールシートが風に吹かれて一斉に空に舞い上がっていた。「どうすんだよぉ」とそこかしこで嘆く声が聞こえる光景がなんだかおかしくて、私は笑った。午前中の競技が終わって以来初めての心からの笑顔だった気がす

る。それはあのお弁当の力だったようにも思える。「午後も応援頑張ろう」。窓に張り付いているみんなを背に、私はもう一度お弁当を食べ始めた。